『雷塘庵主弟子記』訳注（1）

村上正和
豊岡康史
相原佳之
柳　静我
李　侑儒

本稿は、阮元（1764－1849）の年譜である張鑑等撰『雷塘庵主弟子記』の翻訳である。本稿はまずは阮元が二十歳になるまでを訳出した。『雷塘庵主弟子記』の翻訳を通して、嘉慶・道光年間の地方統治や政局の一端を把握していくこと、地方官としての阮元の活動を示していくことが、本稿の目的である。阮元を切り口として嘉慶・道光年間の地方統治について理解を深め、18世紀から19世紀にかけて生じた清朝統治の変容を描いていきたい。

阮元は『経籍籑詁』、『十三経注疏校勘記』、『皇清経解』など経学や科学技術に関する図書編纂事業を主導し、また浙江に詁経精舎、広東に学海堂を設立するなど、各地の学者養成にも尽力した。詩集の編纂も精力的に行っている。そのため阮元について論じる場合、考証学者、もしくは学術や文学の支援者として注目されることが多い[1]。

いっぽうで、阮元は嘉慶・道光年間の地方統治を担った政治家であった。阮元は江蘇省揚州府江都県出身、本籍は儀徴県で、阮儀徴とも呼ばれた。乾隆五十四（1789）年に二甲賜進士出身として、殿試に合格し、その後の昇進試験でも好成績を収め、早くも嘉慶四（1799）年末、署浙江巡撫に抜擢された（翌年初に実授）。その後、嘉慶二十二（1817）年から道光六（1826）年にかけて両広総督を、道光六年から十五（1835）年まで雲貴総督を務めた。道光十五年、大学士に任命されたが中央で影響力を行使することもなく、道光十八（1838）年に帰郷を認められた。中央における政策決定に直接参加することはあまりなかったが、地方統治のエキスパートの一人として嘉慶・道光年間の清朝を支えた重要な人物であったと言えるだろう。

嘉慶四年から親政を始めた嘉慶帝は精力的に政治に取り組み、皇帝を中心とした政治体制の再構築、在地の知識人層からの支持獲得、白蓮教系の宗教結社の摘発、海賊対策、災害救済など多方面にわたる成果を上げていった[2]。その親政初期には、中央では尚書・侍郎クラスのポストに空きが生じ、地方でも総督・巡撫に空席が発生した。その空席の一つを埋めたのが礼部漢右侍郎の任にあった阮元であった。阮元は、嘉慶四年正月に戸部漢左侍郎、すなわち財政部局の次官クラスという要職に抜擢され、さらに総督と駐箚地を異にし、要地浙江一省の統治を担う浙江巡撫に任命された。嘉慶帝の親政開始にともなって、その中央・地方

の統治の要に実務を担う存在として置かれたのが阮元であったのである。

阮元はその後、35年にわたって総督・巡撫として海賊対策、天地会の摘発、漕運の実施、対英関係の調整、救貧事業の実施など精力的に活動した。長期にわたって地方を統括して多様な課題に対処していった阮元は、嘉慶・道光年間の政治改革や統治のあり方を把握する上で最適な人物といえるだろう。

『雷塘庵主弟子記』は、もともとは阮元が浙江巡撫として杭州に滞在していた間、阮元の実務を支えた人物の一人である張鑑（生没年など不詳）が作成した、浙江巡撫阮元の政務の記録である[3]。張鑑は、阮元が設立した詁経精舎で学び、阮元の幕友でもあった。張鑑の作成部分が巻一・巻二とされ、その後、阮元の息子や門人たちが阮元の日記や奏摺などの書類をもとに続編を作成し、また注を加えた。光緒年間の版本には阮元死後の評価についても記録されている。本稿では東洋文庫所蔵の道光年間儀徴阮氏琅嬛僊館刊本を底本とした[4]。【　　】は双行夾注であり、（　　）は訳者による補足である。

『雷塘庵主弟子記』巻一

言葉と行動とは異なるものであろうか。曰く、異なるところはない。人の下にあればその発言は長く影響を残し、人の上にあれば政治を行うのである（韓愈「原道」）。わが師（阮元）はわずか四十歳の時に既に中央・地方の官職を歴任しており、中央の官としてはまだこれから功績も立てるであろうが、教育事業、飢饉救済、盗賊討伐などの数々の重要な事績は、浙江において顕然としている。私（張鑑）は浙江の生まれで、かつわが師の傍に侍すること長かったので、その治績の概略をわずかながら知り得たのである。そこで劉敞の『公是先生弟子記』の書名になぞらえ、年月によって一冊の本とした。読者は、いたずらに言葉と行動とを区別しないでいただきたい。続編を作成したいと思う者がいれば、本編をその始まりとしてもよい。

【道光十八（1838）年に太子太保が贈られたため、後に改訂した。】

先生の名は元、字は伯元、号は雲台、輩行第一である。陳留の尉氏の系である。南宋になってから江西の清江県に移り住み、元末、武勲をたてて名を知られた。明初、豪傑を江南に移住させたのにともない、淮安府に居住した。明朝の万暦帝の頃に、始祖の阮巖は淮安府の山陽県から揚州府へと移った。これが揚州府の江都県に居住するようになった始まりである。代々旧城に暮らしていたが、今の阮千戸巷と呼ばれるあたりがその場所である。崇禎の末に、また城北四十里の公道橋に移り住んだ。

【按ずるに、先生の『揅経室二集』（巻一）所載の「四世祖妣厲太恭人伝」には「我々阮氏は淮安から揚州に移り住んだが、三世祖の阮文広は、明の万暦の時の楡林衛正兵であり、千戸という武官職にあった。官を辞めて揚州の郡城に戻っていたが、その場所は今の旧城の阮

千戸巷である。四世祖の阮秉謙が娶ったのが厲氏であった。四世祖は早世したが、厲氏は節を守って上は舅に仕え、下は子供たちを慈しんだ。崇禎の末、黄得功が儀徴に軍を構え、高傑が揚州城外に軍を構えた。両者が衝突した後、城は危うくなり民は恐怖に震えていた。厲氏は舅に「このように戦闘が行われ、子供たちはみな幼く、このまま暮らすわけにはまいりません。すぐに避難しましょう」と請うた。そこで銀五十両を持ち、舅に随って四人の子を連れて、北門を出て四十里ほど進み、北湖の公道橋に至ってそこで暮らすようになったのである[5]」とある。

阮祜[6]が補足する。父（阮元）は、「曾銑が楡林で軍務を統括していた頃、千戸の官職があったが、世襲でなく流官（中央からの命令によって異動する官職）であった」と述べていた。曾銑は江都の人である。】

二世祖は国祥、字は雪軒。明威将軍を贈られた。三世祖は文広、字は奉軒。楡林衛正兵の千戸であった。四世祖は秉謙、字は尊光。武徳将軍を贈られた。五世高祖は枢良、字は孚循、六世曾祖は時衡、字は宗尹。いずれも昭勇将軍を贈られ、栄禄大夫・光禄大夫・戸部左侍郎を累贈された。

祖は玉堂、号は琢庵。始めて儀徴県に移り、また揚州府城を居所とした。康熙五十四（1715）年（乙未科）の武進士で、三等侍衛となった。花翎を賞賜され、湖南の九谿営、河南の衛輝営の参将を歴任し、昭勇将軍を授けられ、第一頭の軍功によって議叙を受け、資政大夫を贈られ、さらに栄禄大夫・戸部左侍郎も累贈された。

【按ずるに、昭勇将軍の事実は刑部侍郎であった無錫の秦瀛による「九谿営阮将軍祠堂記」（『小峴山人文集』巻四）、「阮昭勇将軍神道碑銘」、及び先生が執筆された行状（「王考琢庵太府君行状」『揅経室二集』巻一）に詳細に書かれている】。

父の承信、字は得中、号は湘圃は国子監生であり、先生の功績によって儒林郎・翰林院庶吉士に封じられ、資政大夫・内閣学士兼礼部侍郎加一級・栄禄大夫・戸部左侍郎加一級・光禄大夫・戸部左侍郎加三級を累贈された。

【按ずるに、阮承信の事績は刑部侍郎であった秦瀛が執筆した「光禄大夫湘圃公神道碑」、山東督糧道道員であり、陽湖の孫星衍が執筆した「湘圃公暨妻林夫人合葬墓誌銘」、「甘泉焦孝廉阮湘圃先生別伝」、及び先生が執筆した「雷塘阡表」（『揅経室二集』巻二）、「湘圃府君顯妣一品夫人林太夫人行状」（『揅経室二集』巻一）に詳細に書かれている】。

曾祖母の周氏、祖母の汪氏、江氏、母の林氏は皆、一品夫人を贈られた。

【阮祜による補足。現在、三代はいずれも体仁閣大学士を累贈された。】

祖父の阮玉堂が苗族討伐に従った時、数千人あまりの苗族が投降してきたことがあった。

上官はこれを殺害しようとしたが、玉堂は命がけで苗族の助命を願い出た。そのため先生が生まれたのは、人々はみなその厚徳によるものであるとした。

乾隆二十九年甲申（1764）

正月二十日の子時、先生は揚州旧城、西門近くの白瓦巷にあった阮玉堂の旧邸南宅で生まれた。時に阮承信は三十一歳であった。

【旧邸の南宅は今では海岱庵に改築された】。

先生が生まれた月日は、唐の白居易と同じであった。

【按ずるに、焦循が嘉慶八年に記した「白香山生日序」には「白居易は自ら、「大暦六（771）年正月二十日に、鄭州新鄭県の東郭宅で生まれた」と記している。白居易が（杭州刺史として）杭州に移った時、年齢は五十を越えていた。今、浙江巡撫である先生は、白居易と同日に生まれたけれども、白居易より十歳ほど早く杭州に着任したのである。】

三十年乙酉（1765）、二歳。

阮承信は先生を連れて府門の西南に移った。

三十一年丙戌（1766）、三歳。

三十二年丁亥（1767）、四歳。

この年、大雨の被害で住宅が崩れ、家中の書籍は濡れてほとんど駄目になった。

三十三年戊子（1768）、五歳。

阮承信は再び先生を連れて新城の花園巷に移った。林氏（母親）は文字を教え始めた。

三十四年己丑（1769）、六歳。

始めて塾師について学んだ。

【按ずるに、先生の「林太夫人行状」（『揅経室二集』巻一）では、「亡母である林氏の一族は福建の莆田出身であり、明の天啓年間に倭寇を避けて、江南の鳳陽に移り住んだが、また揚州甘泉県、西山の陳家集に移った。祖の得斉公、林文璉は博学で、郷里で徳望があったが仕官はしなかった。父の梅谿公、林廷和は乾隆十八（1753）年の挙人であり、福建の大田県の知県となった。乾隆二十九（1764）年、私が生まれた。亡母は自ら乳を飲ませ、五歳の時には字を教えてくれた。六歳になってから塾師について学ぶようになった。私には吃音があり、孟子の「孟施舍の気を守る」（公孫丑章句上）などを読むと口がまわらず、塾から帰ると悔しくて泣いた。亡母は軒先に低い机を出して、私に教えるのに「座りなさい。急いでは

いけません。しばらくは私の口の動きをみてゆっくりと口に出して続きなさい」と言われた。一晩でコツをつかむと、流れるように諳んじることができた。

かつて（母方の）祖父は王維・孟浩然・高適・岑参の（唐の）詩を選んで私に読ませ、あわせて四声属対の法を教えてくれたので、私は八歳か九歳ですぐに詩を作ることができた。塾師が教えたものではないのである。」

林廷和は先生の功績によって、嘉慶三（1798）年に栄禄大夫・戸部左侍郎加一級を特別に賜った。外祖母の俞氏は一品夫人を贈られた。

阮祜による補足。道光年間にまた協辦大学士・雲貴総督を贈られた。】

三十五年庚寅（1770）、七歳

三十六年辛卯（1771）、八歳

三十七年壬辰（1772）、九歳。

阮承信に従って新城の彌陀寺巷に移り住んだ。阮承信は先生のために江氏と婚姻関係を結ぶことにし、江元韜の第四女を（先生の）妻とすることにした。先生の祖母である江氏の孫姪である。

【按ずるに、先生の「己酉題名録」には「妻江氏、陝西西寧府の知府、江洪公の孫娘であり、候選州同恩加頂帯一級江振箕の娘」とある。】

この年、喬書酉先生に従って学んだ。

【按ずるに、『揅経室二集』（巻二）所載の「李晴山・喬書酉二先生合伝」には、「私は九歳の時に喬先生に従って学び、十七歳の時に李先生に従って学んだ。両先生は我が故郷の孤高の学者であったが、お二人を師とすることができたのは、私にとって幸いなことであった」とある。】

三十八年癸巳（1773）、十歳

三十九年申午（1774）、十一歳。

始めて文を学んだ。

【按ずるに、『揅経室二集』（巻一）所載の「湘圃府君行状」には、「私に読書を教えるにあたって、丁寧に教え諭してくださった。父は『資治通鑑』に精通しており、治乱興亡や戦陣謀略について縦横に語り、様々に教導して、私に成果があるよう願ったのである。師の話を恭しく傾聴し、学問に専心することは、実にここから始まったのである。

かつて父は、欧陽脩の「縦囚論」、蘇軾の「代張方平諫用兵書」などの篇を教えるにあたり、身振り手振りを交えて、順次私に教授していき、「学問は有用なものであるべきだ。ただ八

股文を習うのみでは無益なものとなる」と言われた。孫星衍が書いた墓誌銘にも、「三十一歳の時に阮元が生まれた。公が師を選んで学問を教えること非常に厳格で、自らも古文を教授し、「学問は有用なものであるべきだ。いたずらに八股文を研鑽しても無益である」と称された」とある。】

四十年乙未（1775）、十二歳。

四十一年丙申（1776）、十三歳。
　再び阮承信に従って花園巷に移り住んだ。

四十二年丁酉（1777）、十四歳。

四十三年戊戌（1778）、十五歳。
　始めて童試を受験した。

四十四年巳亥（1779）、十六歳。

四十五年庚子（1780）、十七歳。
　この年、先生は進士の李晴山【道南】先生のもとで学び、その家に寓居した。

四十六年辛丑（1781）、十八歳。
　六月二十四日、古家巷に移り住んだ。
　八月初二日、母の林氏が亡くなった。この時、父の阮承信は遠く漢陽（湖北）にまで出ていたので、林氏は家中の事を取り仕切って過労となり、また暑い季節に引っ越しをしたので、七月初頭になって病気となった。
【按ずるに、「林太夫人行状」には、「七月、母君は引っ越しの労苦があった上に、にわかに熱中症となり、八月初二日になって急逝された」とある。】
（阮元は）八月には出立できなかった。阮承信は知らせを聞いて家に戻った。
　十二月、雷塘にある代々の墓地に母の棺を安置した。
【按ずるに、「湘圃府君行状」には、「乾隆四十六年秋八月、母は病のために亡くなった。父は漢陽から小船で風波の中を十日で揚州に戻り、非常に嘆き悲しんだ」とある。また「林太夫人行状」には、「母は雍正十三（1735）年二月初四日に生まれ、わずか四十七歳で、揚州城北の雷塘にある先祖代々の墓地の側に葬られた。乾隆五十五（1790）年に勅命によって安人を贈られた。嘉慶元年、夫人をさらに贈られた。嘉慶四年四月、一品夫人をさらに贈られ、九月に特恩によってかさねて一品夫人を贈られた」とある。】

四十七年壬寅（1782）、十九歳。

家にあって喪に服していた。これまで作ってきた詩詞や八股文から離れて、始めて経学に専心した。凌廷堪が益友となった。

【按ずるに、凌廷堪先生は「大鵬見希有鳥賦」を記して志を示した。このことは『校礼堂文集』（巻三）に詳しい。】

四十八年癸卯（1783）、二十歳。

羅灣に移った。

冬、服喪を終えた。

十二月、父の阮承信は先生を結婚させ、家務を任せることにした。初九日、江夫人がやってきた。

1　阮元に関する伝記的研究として、以下のものがある。王章涛『阮元評伝』（広陵書社、2004年）、郭明道『阮元評伝』（社会科学文献出版社、2005年）、Betty Peh-t'i Wei, *Ruan Yuan, 1764–1849: The Life And Work of a Major Scholar-Official in Nineteenth-Century China Before the Opium War*（Hong Kong University Press, 2006）．学術・文学に関する研究は数多い。ここではベンジャミン・エルマン（馬淵昌也・林文孝・本間次彦・吉田純訳）『哲学から文献学へ　後期帝政中国における社会と知の変動』（知泉書院、2014年）、黄愛平『朴学与清代社会』（河北人民出版、2003年）、市瀬信子「『広陵詩事』における詩会の記録」（『福山平成大学経営学部紀要』第16号、2020年）、同「阮元の地域詩文献における詩会と詩人の記録」（『中国中世文学研究』第74号、2021年）を挙げておく。

2　村上正和・相原佳之・豊岡康史・柳静我・李侑儒『嘉慶研究序説　嘉慶四（1799）年上諭の訳注』（汲古書院、2023年）。

3　浙江巡撫時代の阮元については、阮元の従弟で、その幕下にあった阮亨『瀛舟筆談』（嘉慶二十五年刊）が、当時の奏摺のみならず浙江阮元幕府が処理した書類を引用しながら詳細に記録している。

4　張鑑等（黄愛平点校）『阮元年譜』（中華書局、1995年）、王章涛『阮元年譜』（黄山書社、2003年）、ならびに阮元『揅経室集』（中華書局、1993年）も適宜参照している。

5　阮元「四世祖妣厲太恭人伝」（『揅経室二集』巻一）では、避難する途中で乱兵に遭遇し、厲氏が自らの身をもって舅や子供をかばい顔に傷を負ったこと、清初に家を治めて財産を蓄え、子らが武進士に合格するなど隆盛の礎を作ったことなどが記される。

6　阮元の三男。道光二十三年の挙人で、四川永寧道道員になった。『雷塘案主弟子記』巻七後半の整理にあたったが、それ以前の部分についても、阮元からの聞き取りなどをもとに注を付している。（黄愛平「点校説明」、前掲張鑑等『阮元年譜』中華書局、1995年）。

本稿は科研費基盤（B）22H00701の成果の一部である。翻訳時には、信州大学人文学部で豊岡が担当した東洋史史料基幹演習で作成したテキストも活用した。